

市民政府論

ロック著 鵜飼信成訳

岩波書店 1968 (岩波文庫)

所蔵館 請求記号

本館：X/080/195B

神田分館：/311/L78



[著者プロフィール]

ジョン・ロック

[1632-1704]

イギリス経験論の系譜に属する哲学者
主著『人間悟性論』（『人間知性論』）に
おいて経験論的認識論を体系化

石村 修 (名誉教授・元法科大学院教授)

社会科学の古典であるが、今日読んでも新鮮な、刺激的な文章に溢れている。その内容は、1688年のイギリスの名誉革命を正統化し、さらに、1776年のアメリカ独立宣言に影響を与え、日本国憲法の基盤にもなっている。高校までの教科書に表れていた有名な事象の真意を知り、これからの社会科学の専門領域に入る道標として、是非とも読んでおくべき一冊であろう。

本書は二つの論文の後半部分であるが、この部分は表題にあるように、市民政府が必要に応じて市民の契約に基づいて形成されるプロセスが描かれている。時間のない場合は、1章と7～9章を読まれることをお勧めする。T・ホブズと異にして、ロックは自然状態を「万人の闘争」ではなく「自由な状態」と位置付ける。それでも国家と政府を構成するメリットはどこにあるのであろうか。その回答は、9章の「政治社会と政府の目的」に記されている。

その主たる目的は所有の維持にある。そのために、自然状態では欠けている立法を行い、公平な裁判を実現し、判決を執行する権力という国家機関が必要となり、ここに立法機関を頂点とする権力分立構造が提唱される。当時のイギリスの市民階級のもっぱらの関心である所有（財産）の保持を第一とした点で、名誉革命が正統化されたことになる。さらにこの思想は、アメリカ独立宣言にある「生命・自由・幸福追求（財産）」にも影響を与えたことになる。

訳者の鵜飼は、この翻訳をアメリカでの同窓に託して戦後の混乱のなか京城から日本に送ることができた。こうした訳者の思いも同書から読み取ってもらいたい。